

## 韓国語の連体修飾節名詞句の語彙化

### －日本語との比較－

丁 仁京

キーワード：韓国語、日本語、対照言語学、連体修飾節構造、語彙化

#### 要旨

本稿では、韓国語の「連体形＋名詞」構造における語形成と、日本語の連用形における語形成との比較を行った。韓国語の「連体形＋名詞」構造の中には、①日本語の「動詞連用形＋接尾辞」と同様に、実質的に名詞一語相当の総称的表現を作るもの（[[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>）と、②「連体修飾節＋主名詞＝名詞句」という構造を持ち、連体節が文字通り名詞を修飾し、主名詞が表すものの分類・限定を表す節を構成するもの（[[連体形]<sub>VP</sub> N]<sub>NP</sub>）がある。[[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>において、‘geos（もの）’ ‘gos（ところ）’が主名詞というよりは名詞化辞に近い機能を持ち、形容詞-n 連体形、動詞-l 連体形も、分類・限定というよりは内容補充的な機能を持ち、形容詞は「属性」を、動詞は「目的・用途」を表す。日本語は形態面から一語であることが明確であるのに対し、韓国語では形態面からは一語である場合も句である場合もあり得る。

#### 1. はじめに

日本語で名詞由来の接尾辞の前に動詞が現れる場合は「連用形＋接尾辞」の形をとる。韓国語には「連用形<sup>(1)</sup>＋接尾辞」の構造は存在せず、「連体形＋名詞」の構造をとるか、漢字名詞による表現をとる。

(1) 入り口

(2) a. 타는 곳 〈ta-neun＋gos〉<sup>(2)</sup>（入るところ：入り口）

b. 입구 〈ibgu〉（入口）

このような相違は、日本語は語と節・文のレベルが融合したものが存在するが、韓国語は語と節・文の地位を基本的には区別する（堀江 2001、塚本 2012）ことから生ずる。しかし、韓国語の「連体形<sup>(3)</sup>＋名詞」構造、特に形式名詞 ‘것（geos/もの）’ ‘곳（gos/ところ）’を用いたものには、①日本語の「連用形＋接尾辞」と同じく、実質的に名詞一語相当の総称的表現を作るもの（[[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>）と、②「連体修飾節

＋主名詞＝名詞句」という構造を持ち、連体節が文字通り名詞を修飾する節を構成するもの（[[連体形]<sub>VP</sub> N]<sub>NP</sub>）がある。

本稿は、韓国語の「連体形＋名詞」構造における語形成と、日本語の連用形における語形成との比較を行い、韓国語の「連体形＋名詞」構造における語形成の特徴及びその位置づけを明らかにすることを目的とする。以下、第2節では韓国語の語形成について簡単に概観する。第3節では韓国語の[[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>について、第4節では韓国語の[[連体形]<sub>VP</sub> N]<sub>NP</sub>について述べる。第5節で日本語との比較を行う。第6節では本稿のまとめを述べる。

## 2. 韓国語の語形成の特性と類型

韓国語の単語には「単一語(simple word)」と「複合語(complex word)」がある。また、複合語には「派生語(derived word)」と「合成語(compound word)」がある。本稿の考察対象である「連体形＋名詞」構造は、合成語による語形成であり、ここでは韓国語の合成語、とりわけ名詞の語形成がどのような特性を持ち、どのような類型に分かれるかを簡単に概観してみることにする<sup>(4)</sup>。

韓国語の合成語には、「統語的合成語(syntactic compound)」と「非統語的合成語(asyntactic compound)」がある。統語的合成語とは、合成語を形成する単語同士の結合が句を形成するときと同じ方式で構成されたものであり、そうでないものを非統語的合成語と言う。統語的合成語は、本来句であったものが1つの単語として語彙化したものであるが、それが果たして一語なのか、句なのかはっきりと区別できない場合がある。それを区別する方法として、一般的に分離不可能性の基準が用いられる。分離不可能性とは、2つの単語の間に統語論的な構成素を挿入させても意味が維持されるかどうかを見るものである。また、分ち書きをするかしないかで区分することもある。

(3) a. 손목이 아프다.

son mog-i apeu-da.  
手 首-NM 痛い-DEC

(手首が痛い。)

b. 손과 목이 아프다.

son-gwa mog-i apeu-da.  
手-と 首-NM 痛い-DEC

(手と首が痛い)

(4) a. 첫사랑은 아름답지요.

cheossalang-eun aleumdab-ji-yo.  
初恋-TOP 美しい-FIN-POL<sub>2</sub>

(初恋は美しいですね。)

b. 첫 우리 사랑은 아름답지요.

cheos      uli      salang-eun      aleumdab-ji-yo.  
 初          私達      恋-TOP          美しい-FIN-POL<sub>2</sub>

(初の私達の恋は美しいですね。)

(3a)、(4a)はそれぞれ「名詞+名詞」構成、「連体詞+名詞」構成による合成語である。これらの合成語に(3b)、(4b)のようにそれぞれ「-과 (〜と)」「우리 (私達)」を挿入すると、(3a)、(4a)の「手首」「初恋」の意味としては解釈できない。

合成語には、名詞、動詞、形容詞の合成語があるが、ここでは名詞の合成語について見ることにする (남기심・고영근 (ナム・キシム、コ・ヨンゲン) 1993 参照) <sup>(5)</sup>。

- (5) a. 名詞+名詞: 손발 <son+bal> (手足)、손목 <son+mog> (手首)  
 b. 名詞+繋ぎの入 (사이 시옷) +名詞: 콧날 <kos+nal> (鼻筋)  
 c. 連体詞+名詞: 첫사랑 <cheos+salang> (初恋)  
 d. 用言の連体形+名詞: 굳은살 <gud-eun+sal> ((手足にできる) たこ)  
 e. 動詞の名詞形+名詞: 비빔밥 <bibim+bab> (ませご飯)  
 f. 用言の語幹+名詞: 늦더위 <neut+deowi> (残暑)  
 g. 名詞+動詞の名詞形: 줄넘기 <jul+neomgi> (縄跳び)

(5a)は名詞同士の合成語であるが、名詞同士の合成語には、前後の関係が対等関係にあるものと、前の名詞が後ろの名詞の意味を限定する属性関係にあるものがある。(5d)は連体形と名詞の結合による合成語である。日本語では「入り口」のように、連用形に名詞が結合するのが普通である。(5e)は動詞の名詞形と名詞からなる合成語であるが、ここで現れる動詞名詞形は自立性がない。また、(5b)、(5f)はその構成方式が句を形成するときには見ることができないもので、合成語としてだけ見ることのできる合成語固有の構成方式と言える。

以上、2節では韓国語の合成語、とりわけ名詞の語形成を簡単に概観してみたが、本稿では(5d)の形式で句とも解釈できるものを扱う。次の3節では(5d)の形式が日本語の「動詞連用形+接尾辞」と同じく、実質的に名詞一語相当の総称的表現を作るもの([[連体形] <sub>VP</sub> geos/gos] <sub>N</sub>) から見ることにする。

### 3. [[連体形] <sub>VP</sub> geos/gos] <sub>N</sub>

韓国語の「連体形+名詞」には、日本語の「連用形+接尾辞」と同じく、実質的に名詞一語として使われていると思われるものがある。(6)は名詞部分が自立名詞のものであり、(7)はその類例である。

- (6) a. 굳은살  
 gud-eun sal  
 固い-ADN 肉  
 (固くなった肉：(手足にできる) たこ)
- b. 볼일  
 bo-l il  
 する-ADN 事  
 (する事：用事)
- (7) 앉은키 (座った背：座高)、큰집 (大きい家：本家)、매운탕 (辛い鍋物)、  
 구운밤 (焼いた栗：焼き栗)、큰아버지 (大きい父：伯父)、뜬소문 (浮かび  
 上がった噂：デマ)、열쇠 (開ける鍵：鍵)、건널목 (渡る要所：踏み切  
 り)、디딜방아 (踏む臼：踏み臼) 等

(6a)は、形容詞「굳다 <gug-da> (固い)」の連体形に、「살 <sal> (肉)」がついたものである。「固くなった肉」という名詞句が「(手足にできる) たこ」のように一語として使われている。(6b)は、動詞「보다 <bo-da> (する)」の連体形に、「일 <il> (事)」がついたもので、「する事」という名詞句が、「用事」のように一語として使われる。

(6)、(7)のような「連体形+名詞」は、すでに語彙化され、名詞一語として使われており、統語論的な構成である名詞句が名詞に再分析され作られたものと考えられる。次の(8a)の「伯父」に、(8b)のように「우리 (私達)」を挿入すると、「伯父」としては解釈できず、「大きい父」と解釈されることから、名詞一語として使われていることが分かる。

- (8) a. 큰아버지가 오셨다.  
keu-n abeoji-ga o-syeo-ss-da.  
 大きい-ADN 父-NM 来る-SH-PST-DEC  
 (伯父がいらっしゃった。)
- b. 큰 우리 아버지가 오셨다.  
keu-n uli abeoji-ga o-syeo-ss-da.  
 大きい-ADN 私達 父-NM 来る-SH-PST-DEC  
 (大きい私の父がいらっしゃった。)

また、韓国語の「連体形+名詞」構造において、実質的に名詞一語として使われていると思われるものには、(9)のように名詞部分に形式名詞‘것 (geos/もの)’ ‘곳 (gos/ところ)’を用いて総称的意味を表すものがある。(10)はその類例である<sup>(6)</sup>。

- (9) a. 단것  
 da-n geos  
 甘い-ADN もの  
 (甘い物：甘い物)
- b. 먹을 것  
 meog-eul geos  
 食べる-ADN もの  
 (食べる物：食べ物)
- c. 쉴 곳  
 swi-l gos  
 休む-ADN ところ  
 (休むところ：休みどころ、憩い場)
- (10) a. 매운 것 (辛い物)、시원한 것 (冷たい物)、비싼 것 (高い物)、새로운 것 (新しい物)、두꺼운 것 (厚い物)、큰 것 (大きい物) など
- b. 탈것 (乗る物：乗り物)、들것 (持つ物：担架)、마실 것 (飲む物：飲み物)、입을 것 (着る物：着物)、신을 것 (履く物：履物)、빨 것 (洗う物：洗濯物)、자를 것 (切る物)、쓸 것 (書く物) など
- c. 잘 곳 (寝るところ)、먹을 곳 (食べるところ)、마실 곳 (飲むところ) など

(9a)の「甘い物」は甘いものの中の一部である「お菓子」などを表し、(9b)の「食べる物」は飲み物を除いた「食物」を表している。また、(9c)の「休むところ」も休むことができるものの中で「明確に人を休ませることを目的とした場所」を表している。(10)の類例も同様である<sup>(7)</sup>。

### 3.1 [[連体形] <sub>VP</sub> geos/gos] <sub>N</sub>の意味的・形態的特徴

韓国語において [[連体形] <sub>VP</sub> geos/gos] <sub>N</sub> が全体で一語相当であることは、次のことから確認できる。

第一に、意味的なまとまりの点で日本語の「連用形+接尾辞」と共通している。韓国語母語話者の中には‘geos’による総称的表現を分かち書きしない人も少なくないが、これも意味的に1つのまとまりを作っていることの反映と考えられる。

- (11) a. 藥を飲む。  
 b. \*藥は飲み物だ。
- (11') a. 약을 먹다.  
 yag-eul meog-da.  
 藥-ACC 食べる-DEC

b. \*약은 먹을 것이다.

yag-eun            meog-eul            geos-i-da.  
 薬-TOP            食べる-ADN            もの-COP-DEC

(12) a. 벤치で休む。

b. \*벤치는休みどころだ。

(12') a. 벤치에서 쉬다.

benchi-eseo            swi-da.  
 벤치-で            休む-DEC

b. \*벤치는 쉬 곳이다.

benchi-neun            swi-l            gos-i-da.  
 벤치-TOP            休む-ADN            ところ-COP-DEC

日本語では(11)に示したように、薬は「飲む」物ではあっても、「飲み物」ではない。(12)も同様に、ベンチは「休む」ところではあっても、「休みどころ」ではない。韓国語の ‘geos’ ‘gos’ も同様のことが言え、[[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>は意味的に一語であると言える。

第二に、(i) 連体形と名詞の間にポーズ (#) を置けない、(ii) 指示代名詞「이 (i/この)」を挿入できない、(iii) 連体形のみを副詞によって修飾することができない。以下、それぞれの例を見てみよう。まず、(13a)の「飲み物」を(13b)のようにポーズを置くと総称的な意味はなくなり、(13c)のように解釈される。

(13) a. 갑자기 단 것이 먹고 싶어진다. (BRE00293)

gabjagi            da-n            geos-i            meog-go            sip-eo            ji-n-da.  
 急に            甘い-ADN            もの-NM            食べる-たい-なる-PRE-DEC  
 (急に甘い物が食べたくなるな。)

b. \*갑자기 단 (#) 것이 먹고 싶어진다.

gabjagi            da-n            (#)            geos-i            meog-go            sip-eo            ji-n-da.  
 急に            甘い-ADN            (#)            もの-NM            食べる-たい-なる-PRE-DEC  
 (急に甘い (#)物が食べたくなるな。)

c. 갑자기 단 (#) 초콜릿이 먹고 싶어진다.

gabjagi            da-n            (#)            chokollis-i            meog-go            sip-eo            ji-n-da.  
 急に            甘い-ADN (#)            초콜릿-NM            食べる-たい-なる-PRE-DEC  
 (急に甘い (#) 초콜릿が食べたくなるな。)

(14a)の「飲み物」も、(14b)のように指示詞を挿入することで総称的表現としては解釈できない。(14c)は動詞-n 連体形が連体修飾節の構造として解釈される。(15a)も総称

的表現としては解釈出来ず、(15b)のように連体修飾節の構造として解釈される。

- (14) a. 가정부가 유리컵에 마실 것을 담아 내왔다. (BRE00293)  
 gajeongbu-ga yuliceob-e masi-l geos-eul dam-a naewa-ss-da.  
 家政婦-NM ガラスのコップ-に 飲む-ADN もの-ACC 入れて出す-PST-DEC  
 (家政婦がガラスのコップに飲み物を入れて出した。)
- b. \*가정부가 유리컵에 마실 이 것을 담아 내왔다.  
 gajeongbu-ga yuliceob-e masi-l i geos-eul  
 家政婦-NM ガラスのコップ-に 飲む-ADN この もの-ACC  
 dam-a naewa-ss-da.  
 入れて出す-PST-DEC  
 (家政婦がガラスのコップに飲みこれ (このもの)を入れて出した。)
- c. [내가 마시는] 이 것은 가정부가 유리컵에 담아 내왔다.  
 [nae-ga masi-neun] i geos-eun gajeongbu-ga  
 私-NM 飲む-ADN この もの-TOP 家政婦-NM  
 yuliceob-e dam-a naewa-ss-da.  
 ガラスのコップ-に 入れて出す-PST-DEC  
 (私が飲んでいるこれ (このもの)は家政婦がガラスのコップに入れて出した。)
- (15) a. \*식사 후에 [마실 것] 있어요?  
sigsa hu-e [masi-l geos] iss-eoyo?  
 食事 後-に 飲む-ADN もの ある-POL<sub>2</sub>-Q  
 (食後に飲みものがありますか。)
- b. [식사 후에 마실] 것은 있어요?  
 [sigsa hu-e masi-l] geos-eun iss-eoyo?  
 食事 後-に 飲む-ADN もの-TOP ある-POL<sub>2</sub>-Q  
 (食後に飲むものはありますか。)

このように、2つの単語の間に統語論的な構成素を挿入できないこと、外部の要素が2つの単語のうちの一語のみを修飾できないことから、総称的表現の [[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>は形態的にもひとかたまりであると言える。

これら、実質的に名詞一語として使われる韓国語の「連体形+名詞」において、形容詞は-n連体形を、動詞は-l連体形をとる。形容詞が表す属性は時間性に関係なくモノに本来的属性として具わったものであるから、概念としての属性を表す場合は-n連体形が用いられる。一方、「動詞+geos/gos」が総称的に用いられる場合は、「食べる物=食べるためのもの」、「飲む物=飲むためのもの」、「休むところ=休むための場所」という

ように、動詞が「目的・用途」を表す。動詞が表す動作・変化は時間性を伴って実現されなければ現実のものにならないので、概念としての動作・変化を表す場合は-I連体形が用いられる<sup>(8)</sup>。韓国語の総称的表現につく動詞-I連体形は日本語の連用形語幹と似ていると言え、一種の不定詞と考えられる。

これは、漢字の意味説明の際に、(16)のように-I連体形を用いることと通ずる現象である<sup>(9)</sup>。この場合、-I連体形は内容補足的な機能を持っている。動詞・形容詞は単なる思考上の概念を表すのみで、現実の動作や属性は表さない。思考上の概念は現実とは別に存在するものであるため、-I連体形が用いられると説明できる。

(16)	갈 거 (去)、	올 래 (来)、	매울 신 (辛)
	ga-l      geo	o-l      lae	maeu-l      sin
	行く-ADN 去	来る-ADN 来	辛い-ADN 辛
	さる-キョ	くる-ライ	からい-シン

以上のように、総称的表現としての [[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>は全体で一語相当であると見ることができる。そのことを考慮すると、総称的表現としての [[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>においては、‘geos’ ‘gos’は実質的な意味が薄く、主名詞というよりは名詞化辞に近い機能を持ち、動詞-I連体形、形容詞-n連体形も、分類・限定というよりは内容補足的な機能を持つと考えることができる<sup>(10)</sup>。

#### 4. [[連体形]<sub>VP</sub> N]<sub>NP</sub>

前節で挙げた(9)、(10)と異なり、次の(17)のような例は、意味的に [[連体形]<sub>VP</sub> N]<sub>NP</sub>という構造を持ち、連体修飾節が文字通り名詞を修飾し、主名詞が表すものの分類・限定を表す節を構成する。

- (17) a. 나가는 곳 <naga-neun+gos> ((経路としての) 出るところ : 出口)  
 b. 보내는 사람 <bonae-neun+salam> ((郵便物の) 送る人 : 送り手)  
 c. 요리하는 사람 <yoliha-neun+salam> ((人の中の) 料理する人 : 料理人)  
 d. 바르는 약 <baleu-neun+yag> ((薬の中の) 塗る薬 : 塗り薬)  
 e. 가르치는 법 <galeuchi-neun+beob> (教える (方) 法 : 教え方)

[[連体形]<sub>VP</sub> N]<sub>NP</sub>の場合、「사람 (salam/人)」、「약 (yag/薬)」、「법 (beob/法)」は単独で名詞として機能する。また、前節で述べた [[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>に比べて主名詞の意味が強く、(程度差はあるが)生産的であり、主名詞においても制限がない。また、(18)のように「그런 (geuleon/そういう)」の挿入も可能であり、総称的表現を持つ ‘geos (もの)’ ‘gos (ところ)’よりは形態的にも分析的であると言える。



- (18) a. 요리하는 그런 사람  
 yoliha-neun gueleon salam  
 料理する-ADN そういふ 人  
 (料理する、そういう人)
- b. 바르는 그런 약  
 baleu-neun gueleon yag  
 塗る-ADN そういふ 薬  
 ((患部に) 塗る、そういう薬)

[[連体形] VP N] NP の場合は、主名詞が表すものの分類・限定を表し、動詞-n 連体形（正確には現在連体形-neun）が用いられる。(17)の「나가는 곳=출구 <naga-neun + go=culgu> (出るところ=出口)」、「보내는 사람=발송인 <bonae-neun + salam=balsong in> (送る人=発送人)」、「요리하는 사람=요리사 <yoliha-neun + salam=yolisa> (料理する人=料理師)」などのように、特定された1つの語彙に置き換えが可能である。

なお、(17a)のような交通機関に関連する用語のほとんどは、日常生活の中で非常に身近なものとして一語のように認識され、「ここから入る」「ここから出る」などのように経路を表し、現場性が非常に強いと言える。しかし、「나가는 곳 (出るところ)」に、(19a)のように「1番」をつけて言うことはできず、(19b)のように漢字名詞「출구 <chulgu> (出口)」を使って言う。(20)も同様のことが言える。

- (19) a. \*1번 나가는 곳이 어디예요?  
 1-beon naga-neun gos-i eodi-ye-yo?  
 1番 出る-ADN ところ-NM どこ-COP-POL<sub>2</sub>-Q  
 (1番出るところはどこですか。)
- b. 1번 출구가 어디예요?  
 1-beon culgu-ga eodi-ye-yo?  
 1番 出口-NM どこ-COP-POL<sub>2</sub>-Q  
 (1番出口はどこですか。)
- (20) a. \*이 요리하는 사람을 알아요?  
 i yoliha-neun salam-eul al-ayo?  
 この 料理する-ADN 人-ACC 知る-POL<sub>2</sub>-Q  
 (この料理する人を知っていますか。)
- b. 이 요리사를 알아요?  
 i yolisa-leul al-ayo?  
 この 料理師-ACC 知る-POL<sub>2</sub>-Q  
 (この料理人を知っていますか。)

このことから、[[連体形]<sub>VP</sub> N]<sub>NP</sub>は一語のように認識されていても、漢語名詞のように完全に一語になっているわけではないと言える。

以上、第3、4節にわたって韓国語の「連体形+名詞」の構造において、意味的な面から [[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>構造と [[連体形]<sub>VP</sub> N]<sub>NP</sub>構造について見てきた。3節で見た「形容詞-n 連体形+geos」は属性の意味を、「動詞-l 連体形+geos/gos」は目的・用途の意味を表し、「もの」「ところ」の総称的表現として使われていることを示した。4節で見た「動詞-n 連体形+名詞」は、主名詞が表すものの分類・限定を表していることを示した。

## 5. 日本語との比較

日本語で名詞由来の接尾辞の前に動詞が現れる場合は「連用形+接尾辞」の形をとる(影山 1993、塚本 2012 など)。名詞由来の接尾辞の中には、実質的な意味を保持しているものから、実質的な意味を失って形式的になったものまで、程度差はあるが生産的に作ることが可能である。

- (21) 歩き方、歌い手、飲み屋、見つけ次第、曇りがち、焼きたて、立ちづめ、負けどおし、帰りしな、帰りがけ、敷きつぱなし、遊びがてら、遅れぎみ、食べ放題、腹のへり加減、など。

日本語では「食べものを食べた」「飲みものを飲んだ」「乗りものに乗った」と言える。一方、韓国語の [[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>にも同じことが言えるが、文脈によっては「食べるべきものを食べた」「飲むべきものを飲んだ」「乗るべきものに乗った」とも解釈できる。

- (22) a. 먹을 것을 먹었다.

meog-eul	geos-eul	meog-eoss-da.
食べる-ADN	もの-ACC	食べる-PST-DEC
(食べ物を食べた。)		

- b. 마실 것을 마셨다.

masi-l	geos-eul	masyeo-ss-da.
飲む-ADN	もの-ACC	飲む-PST-DEC
(飲み物を飲んだ。)		

- c. 탈것을 탔다.

ta-l	geos-eul	ta-ss-da.
乗る-ADN	もの-ACC	乗る-PST-DEC
(乗り物に乗った。)		

また、日本語では「履物を履く」「休みどころで休む」と言えるが、この場合、韓国語では [[連体形] VP geos/gos] N は「履くべきものを履いた」「休めるところで休んだ」という意味になる<sup>(11)</sup>。

(23) a. 신을 것이 없다.

sin-eul	geos-i	eobs-da.
履く-ADN	もの-NM	ない-DEC
(履物がない。)		

b. 신을 것을 신었다.

sin-eul	geos-eul	sin-eoss-da.
履く-ADN	もの-ACC	着る-PST-DEC
(履くべきものを履いた。)		

(24) a. 쉴 곳이 없다.

swi-l	gos-i	eobs-da.
休む-ADN	ところ-NM	ない-DEC
(休みどころがない。)		

b. 쉴 곳에서 쉬었다.

swi-l	gos-eseo	swi-eoss-da.
休む-ADN	ところ-で	休む-PST-DEC
(休めるところで休んだ。)		

(23a)、(24a)の場合は、履物の全般、乗り物の全般を表し、総称的表現になるが、(23b)、(24b)の場合は、ある特定の「靴」や「場所」を指し、総称的表現ではなく、[[連体形] VP N] NP 構造で解釈される。(23b)、(24b)が義務や可能の意味として解釈されるのは、統語的に-l 連体形によるものと考えられる。このことは、韓国語の「-l 連体形+geos/gos」の‘geos (もの)’ ‘gos (ところ)’ がすべて総称的表現になるわけではないことを示している。日本語の「連用形+接尾辞」は、形態面から一語であることが明確であるのに対し、韓国語では形態面からは一語である場合も句である場合もあり得るということであろう。

韓国語には語形成にのみ用いられる形式がないため、日本語のような表現をするためには、「連体形+名詞」構造をとるか(例(25))、または、漢字名詞による表現をとるか(例(26))、を選択しなければならない。日本語の場合は、(27)のように「連用形+接尾辞(名詞)」構造を好み、また、韓国語のような「漢字+する」の場合は、漢字名詞による表現を好んでいることが伺える。

(25) a. 먹을 것 <meog-eul+geos> (食べる物: 食べ物)

- b. 나가는 곳 〈naga-neun+gos〉 (出るところ：出口<sup>でぐち</sup>)  
 c. 요리하는 사람 〈yoliha-neun+salam〉 (料理する人：料理人)
- (26) a. 음식 〈eumsig〉 (飲食)  
 b. 출구 〈chulgu〉 (出口)  
 c. 요리사 〈yolisa〉 (料理師)
- (27) a. 食べ物                      a'. 食物  
 b. 出口<sup>でぐち</sup>                      b'. \*出口<sup>ショッコウ</sup>  
 c. \*料理する人                  c'. 料理人

## 6. まとめ

本稿では、韓国語の「連体形+名詞」構造における語形成と、日本語の連用形における語形成との比較を行った。

韓国語の「連体形+名詞」構造の中には、①日本語の「動詞連用形+接尾辞」と同様に、実質的に名詞一語相当の総称的表現を作るもの ([[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub>) と、②「連体修飾節+主名詞=名詞句」という構造を持ち、連体節が文字通り名詞を修飾し、主名詞が表すものの分類・限定を表す節を構成するもの ([[連体形]<sub>VP</sub> N]<sub>NP</sub>) がある。

上記① [[連体形]<sub>VP</sub> geos/gos]<sub>N</sub> において、‘geos (もの)’ ‘gos (ところ)’ は主名詞というよりは名詞化辞に近い機能を持っており、形容詞-n 連体形、動詞-l 連体形も、分類・限定というよりは内容補足的な機能を持ち、その形容詞は「属性」を、動詞は「目的・用途」を表す。

日本語の「連用形+接尾辞」は、形態面から一語であることが明確であるのに対し、韓国語は「連体形+名詞」の形をとるため、形態面からは一語である場合も句である場合もあり得るということが明らかになった。

本稿で取り扱った韓国語の「連体形+名詞」構造の合成語は、すべて語彙化され一語として辞書に載っているわけではなく、また、先行研究も少ないのが現状である。本稿での考察も十分に論証されたとは言えないが、今後の「連体形+名詞」構造における語形成の研究の発展に資するものと考えられる。

### 〔注〕

- (1) 本稿で言う「連用形」は、「아/어/여 〈a/eo/yeo〉 形」、「第三活用形」、「第Ⅲ語基」などの用語で呼ばれることもある。
- (2) 韓国語ローマ字表記は、韓国文化観光部のローマ字表記法（第2000-8号）に従う。
- (3) 韓国語の連体形は品詞によってその現れ方が異なる。連体形-eun と-eul は、子音語幹では-eun、-eul で、母音語幹では-n、-l で現れるが、本稿では、-eun と-n、-eul と-l

は異形態として、-n と-l で代表して表記する。

品詞	回想	過去	現在	未来(予期)
動詞	-던 <deon>	-(으)ㄴ <eun>	-는 <neun>	-(으)ㄹ <eul>
形容詞	-던 <deon>	-(으)ㄴ <eun>	-(으)ㄹ <eul>	-(으)ㄹ <eul>
指定詞	-던 <deon>	-ㄴ <n>	-ㄹ <l>	-ㄹ <l>
存在詞	-던 <deon>	-는 <neun>	-을 <eul>	-을 <eul>

- (4) 派生語には接頭辞による派生語と接尾辞による派生語に区分することができる。韓国語は接頭辞より接尾辞が発達しているために、接頭辞よりはその種類も多様であり、生産性においても差異が大きい。派生語を形成については、임흥빈(イム・ホンビン)(1989)、남기삼・고영근(ナム・キシム、コ・ヨングン)(1993)、김창섭(キム・チャンソプ)(1996, 2011)、이익섭・채완(イ・イクソプ、チェ・ワン)(1999)、李翊燮・李相億・蔡琬(2004)、北村(2007)などを参照されたい。
- (5) 合成動詞には、「主語+述語」「目的語+述語」「副詞語+述語」「連用形+動詞」「動詞語幹+動詞」「副詞+動詞」がある。合形成容詞には、「主語+述語」「副詞語+述語」「形容詞語幹+形容詞」「反復語」がある。その他、合成副詞がある。詳しくは、남기삼・고영근(1993)、김창섭(1996, 2011)、이익섭・채완(1999)、李翊燮・李相億・蔡琬(2004)、北村(2007)などを参照されたい。
- (6) 形式名詞‘geos’が結合したものの中には、「단것 <da-n+geos>(甘い物)」、「탈것 <ta-l+geos>(乗り物)」、「들것 <deu-l+geos>(担架)」は、名詞として『표준국어대사전(標準国語大辞典)』(国立国語研究院編 1999)に記載されているものである。
- (7) 韓国語において、「連体形+名詞」構造による語形成は、名詞化接尾辞‘-기 gi’や‘-음 eum’ほど生産的ではない。
- (8) 英語でも、「甘い物」は something sweet、「食べる物」は something to eat のように形容詞と動詞では修飾のしかたが異なる。
- (9) 丁(2012a, b)では、連体形-n と-l を、テンスやアスペクトの意味を表すものではなく、「現実(realis)」「非現実(irrealis)」というモダリティの意味を表すものと捉えている。
- (10) 国語(韓国語)学者の中には、連体形-n と-l を名詞化辞または、補文素として扱っている研究もある。임흥빈(1982)では、連体形-n と-l が中世韓国語で動名詞(名詞化辞)として使われていたことを前提に、現代連体形-n と-l にも中世韓国語の動名詞(名詞化辞)の機能が残っていることは十分に予測可能であるとしている。もし、連体形-n、-l が‘-음 eum’や‘-기 gi’のように名詞化接尾辞として考えられるとしたら、日本語の連用形-i と非常に似ていると言えよう。
- (11) 日本語においても、「やることやってから文句言いなさいよ。」「座るところをとにかく探そうよ。」のような表現は、義務や可能の意味として解釈される。

#### 略語とその意味

ACC:Accusative particle(対格助詞)、ADN:Adnominal modifier suffix(連体形)、COP:Copula

(指定詞)、DEC:Declarative suffix (平叙文表示形式)、FIN:Final form (終助詞)、INT:Intimate suffix (非格式体非丁寧形)、NEG:Negative (否定)、NM:Nominative particle (主格助詞)、POL<sub>1</sub>:Formal Politeness suffix (格式体丁寧形)、POL<sub>2</sub>:Informal Politeness suffix (非格式体丁寧形)、PRE:Present (現在・非過去)、PST:Past tense and perfect aspect suffix (過去表示形式)、Q:Question marker (疑問表示形式)、SH:Subject honorific suffix (主体尊敬語尾)、TOP:Topic-contrast particle (主題助詞)

#### 用例出典

CD-ROM 『21세기 세종계획 최종 성과물 (21世紀世宗計畫最終成果物)』(2007)、문화관광부·국립국어원  
[文語コーパス: 原始] (BRE00293) 『꽃그늘 아래』 이혜경、2002

#### 参考文献

- 이익섭·채완 (イ・イクソプ、チェ・ワン) (1999) 『국어문법론강의 (國語文法論講義)』 학연사
- 李翊燮·李相億·蔡琬 (2004) 『韓國語概説』大修館書店、(前田真彦訳・梅田博之監修)
- 임홍빈 (임·홍빈) (1982) 「동명사 구성의 해석 방법에 대하여 (動名詞構成の解釈の方法について)」 『백영 정병욱선생 회갑기념논총 (백영준·정병욱先生의還曆記念論叢)』 新丘文化社、pp. 287-320 (임홍빈 1998a、pp. 553-568 に再録)
- 임홍빈 (1989) 「통사적 파생에 대하여 (統語的派生について)」 『어학연구 (語學研究)』 25-1、pp. 167-196 (임홍빈 1998b、pp. 33-64 に再録)
- 임홍빈 (1998a) 『국어 문법의 심층 1 (國語文法の深層 1)』 태학사
- 임홍빈 (1998b) 『국어 문법의 심층 2 (國語文法の深層 2)』 태학사
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 菅野裕臣 (1982) 「朝鮮語의 語彙 I 語彙および語構造」 『外國語と対照Ⅲ』 講座日本語学 12、明治書院、pp. 35-49
- 北村唯史 (2007) 「造語論から接近」 『韓國語教育論講座 第1巻』 くろしお出版、pp. 675-694
- 김창섭 (キム・チャンソプ) (1996) 『국어의 단어형성과 단어구조 연구 (國語の單語形成と單語構造の研究)』 國語學叢書 21、태학사
- 김창섭 (2011) 「한국어 어휘론 (韓國語語彙論)」 『한국어 교육의 이론과 실제 1 (韓國語教育の理論と実體)』 서울대학교한국어문학연구소、국어교육연구소、언어교육원 (共編)、아카넷、pp. 187-242
- 국립국어연구원 (編) (1999) 『표준국어대사전 (標準國語大辭典)』 두산동아

- 송철의 (ソン・チョルイ) (1992)『國語의 派生語形成 研究 (国語の派生語形成の研究)』  
国語學叢書 18、태학사
- 丁仁京 (2012a)「現代韓国語の形式名詞 ‘것 *geos*’ に由来する諸形式の研究」麗澤大学  
大学院言語教育研究科博士論文
- 丁仁京 (2012b)「韓国語の連体形語尾 -ㄴ, -ㄴ의 意味機能－現実・非現実の観点から－」  
第 63 回朝鮮学会大会、ハンドアウト
- 丁仁京 (2013)「韓国語の〈連体修飾節＋名詞〉構造における語形成の位置づけ－日本  
語との比較－」『日本言語学会第 147 回大会予稿集』 pp. 308-313
- 塚本秀樹 (2012)『形態論と統語論の相互作用－日本語と朝鮮語の対照言語学的研究－』  
ひつじ書房
- 남기심・고영근 (ナム・キシム、コ・ヨンゲン) (1993)『표준국어문법론 (標準国語文  
法論)』改訂版、塔出版社
- 堀江薫 (2001)「膠着語における文法化の特徴に関する認知言語学的考察－日本語と韓  
国語を対象に－」山梨正明他(編)『認知言語学論考 No. 1』ひつじ書房、pp. 185-227

〔付記〕本研究は、2013 年 11 月に行われた日本言語学会第 147 回大会にて口頭発表し  
た内容に加筆・修正を加えたものである。本稿の執筆にあたり、査読をしてくださった  
お二人の先生に貴重なご助言を頂いた。心より感謝申し上げます。なお、本研究は平成  
25 年度麗澤大学大学院ポストドクターの研究成果である。

